

研 究 報 告

評伝のための研究ノート I

——浅井忠の性格についての一考察——

阿 部 信 雄  
(ブリヂストン美術館学芸員)

## 〈評伝のための研究ノート I〉

### ——浅井忠の性格についての一考察——

阿 部 信 雄

#### 序

この小論は、表題の示す通り、浅井忠の性格について考察を加えようとするものであるが、いわゆる診断を下すことをその目的としていない。仮に、浅井の性格に多少とも常識からの逸脱が認められるとしても、精神医学者でも臨床心理学者でもない私には、それに一つの、あるいは複数の病名を与える資格もないし、またその任にもない。ただ、現在までは年代記としてのみ編まれて来た浅井に関する資料を、性格特徴を基軸として整理し直そうという試みである。浅井忠の病跡学的研究に対して、何らかの示唆を与え得れば幸いと思う次第である。

なお、基本的伝記に関しては隅元謙次郎『浅井忠』<sup>1)</sup>を参照されたい。

#### 1

浅井忠は、1856年（安政3年）、佐倉藩士浅井伊織常明の長男として江戸木挽町の佐倉藩邸に生まれている。男ばかりの同胞3人中の長男であった。5歳の時に次弟の豊次郎を亡くしている。1863年（文久3年）、父と祖父がともに死亡し、満7歳で家督を相続した。浅井氏は、代々200石取りで公用人役、番頭役あるいは年寄役を勤める家柄であった。同年、浅井家は佐倉へ移住する。明治維新を5年後に控え、時勢がいよいよ切迫し、藩士の江戸引き揚げが行なわれたのである。一家は、暫時叔父の都鳥助八のもとに寄寓した後、郊外の将門山に土地を賜わり、新築費用も給せられて、そちらへ定住した。この将門の屋敷であるが、やはりこの時、佐治三左衛門なる江戸詰の藩士が、飯野山という所に、浅井忠之丞（忠の当時の名乗り）と同じ8反歩の土地を賜わって建てた家屋の見取り図が『佐倉市史』<sup>2)</sup>に載せられており、それから推測すると、浅井家もかなり大きなものであったと思われる。このように、幼い頃から一家の主として過重な責任を負わされて成長したことと、現代的表現を使えば母子家庭に育ったことは、浅井の性格の形成に拭い難い影響を残したに違いない。

事実、彼は少年期より通常の子供とは異なる、一種老成した態度を示したことが伝えられている。友人であった田中暢は次のように回想している。

その才気は発動して外に溢れず、寧ろ内には充滿せし方なり、君は余りに雑談は嗜まざれども、去りとて無口の方にてはあらず、総て円満主義なりき、勿論大身の家に生れ、加うるに厳正なる伯父等の教養を受けられし故に、いよいよ、其人格は養成せられたりしが如し、又君の特長としては忽ての事に規律を守りし様に記憶せり<sup>3)</sup>。

また、従兄弟の窪田洋平もやはり次のように記している。

維新の際、尚武の余弊士気殺伐にして、群童党を結び日々争鬪を事としたれども、彼は曾て人と争いたる事なし、平和は彼の天性なりし<sup>4)</sup>。

ここに見られるのは、あまり子供らしくない、窪田の表現を借りれば「唯温良なる秀才貴公子」<sup>5)</sup>としての少年像である。10歳前後の少年であっても、「大身の家」の家長ともなれば、封建社会の厳しい規範の下では群童に交わって遊ぶこともままならなかったに違いない。そして、そのような消極性は、生涯にわたって彼の基本的態度となった。乾由明氏は、中沢岩太<sup>6)</sup>の言葉を引いて次のように記している。

後年、中沢岩太は、浅井が利欲にいささかも執着することがなく、「その挙動はまったく昔日の武士にことなる」ところのない「武士的画家」であったと述べている<sup>7)</sup>。

しかし、彼の消極的態度の因って来たる所の性格に関しては、封建制の桎梏よりも、未亡人となった母親との関係がむしろ大きな作用を及ぼしたと考えられる。

改めて繰り返すまでもないが、フロイト (Sigmund

Freud, 1856~1939)によれば、子供は、同性の親との同一視によって性役割、善悪の基準、良心などを学び、自らの中に内在化して行くと考えられる。このフロイトの同一視説に基づき、柏木恵子氏は、一連の「Doll Play 法」を用いた研究の成果を引いて、以下のように述べている。

……男児の攻撃性は、父親の有無や父親とその子どもとの関係に関連しているという報告がなされている。(中略)父との同一視が強く、かつ父から罰が与えられている男児は、父との同一視が弱く母から罰をうけている男児に比べて、攻撃性の頻度が高い (Levin & Sears 一九五六)。これらのデータは、男児に特徴的な攻撃性は、子どもが父親との同一視により、父親の攻撃的特徴を取得してゆくことを示すものと考えられている。

このことは、父親不在の家庭の男児が、父親のいる家庭の男児に比べて、攻撃性が低いという知見からも支持される。Sears ほか (一九四六)は、就学前幼児について、また Back (一九四六)は四歳から十歳の児童期にわたる広範囲について、この父親不在の男児の攻撃性が低いことを確認している<sup>8)</sup>。

ただし、同一視の時代は子供の発達に於る性器期(2~6歳)に当たるとされており、忠(当時は忠之丞)が父親を失ったのは満7歳の時であるから、同一視不全の臨界期(2~4歳)ははるかに超えていたことになる。しかし、「群童」と交わず「平和」を「天性」とする少年=忠之丞の心裡に、一種の男性的性格の欠除を見ることは、あながち不当とは言えないであろう。

さらに、浅井忠の生活史に於て最も注目すべき事柄の一つはその結婚である。石井柏亭は、浅井の結婚に関して次のように述べている。

二十六年(1893年)十月浅井は同藩立見直の妹安子を娶った。年は浅井が三十八で安子は二十五、晩婚の方である。弟達三は既に数年前に結婚して其頃は高崎に居た。浅井には本多錦吉郎の媒介で前に一度縁談があったにはあった。それは静岡の人で金井清子と云った。けれども浅井はひどく其新婦を嫌って婚礼の夜既に家を脱け出したりした位で、おきにな縁になった。母親との間柄もよくはなかった。友人本多の介にして此事あったのは寧ろ不可解である<sup>9)</sup>。

浅井が最初の妻を離縁した理由は「不可解」であって、明らかではないが、二度目の妻で、生涯連れ添った安子との間にも子供がなかったことと考え合わせれば、彼が性的な適応に失敗していた可能性もある。スーラ・ウルフ (Sula Wolff) は、父親不在の家庭に育った男性に関して次のように述べている。

一方患者群のほうは未亡人となった母親に独立していく力のない場合が多い。彼女らは子供、特に息子にすがる。息子を父の座にすわせたがるのだが、これは子供にとって迷惑至極である。未亡人の息子は青年期に他との独立的な関係を作ることがむずかしくなる。勤労者としての生活は成功していても性的適応に失敗して一人者であることが多い。母親の家にずっとしばられているが、もしくは結婚しても未亡人の母と妻の間であって多くの問題をおこすことになる<sup>10)</sup>。

浅井忠自身が、上のようなケースに当たると断定することは出来ないが、渡仏帰国後、京都に開いた聖護院美術研究所(1903年〈明治36年〉開設)以来の愛弟子の一人黒田重太郎<sup>11)</sup>も次のように回想しており、晩年に至るまで浅井の生活の公私にわたって母親が主導した様子が窺われる。

書生への思いやりがあって、女弟子なんか芝居によく御母堂のお伴をさしてもらっていた。書生をかわいがるのは御母堂ゆずりであった<sup>12)</sup>。

以上、浅井忠の生活史の極く一端に触れつつ、「武士的」と評される外貌の裏に男性的ならざる性格が形成されていたことを推察したが、次に、浅井忠の性格特徴をその体格から考察して見たい。言うまでもなく、その典拠はクレッチマー (Ernst Kretschmer, 1888~1964)による『体格と性格』<sup>13)</sup>の類型である。

## 2

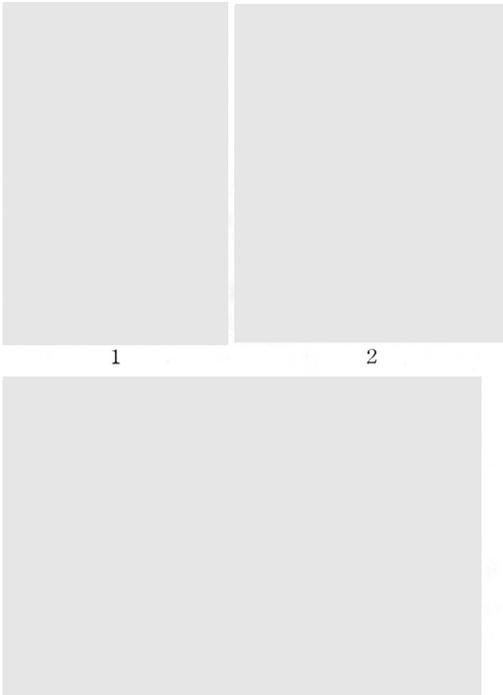
浅井の体格に関しては、石井柏亭が『浅井忠』の中で次のように特筆している。

浅井は日本人としては背丈高く足も長い方であったから、外国人の中へ出しても決して恥しい風采ではなかった。在留の邦人達は、よく日本人も浅井君位の体格があれば立派だと云ったことである<sup>14)</sup>。

また、肖像写真 (pl. 1, 2) や集合写真 (pl. 3, 中

中央向き、帽子に羽織袴)から判断しても、彼が衆に秀れて長身であり、がっしりとした闘士型(筋骨型)であったことが分る。クレッチマーの類型によれば、このような闘士型の体格はてんかん質(粘着気質)と高い相関関係があるとされる。付け加えるまでもないことであるが、てんかん質とは、実際のてんかんの発作を起こす人の性格という意味ではない<sup>15)</sup>。それは、一定の性格特徴によって分類された気質の一類型である。そして、その性格特徴とは、およそ以下のようなものである。

粘着気質というのは文字通り、ねばっこい性格である。ひとつのことに執着して変化したり動揺したりすることが少なく、几帳面で秩序を好む。ものの考え方、理解の仕方がおそく思考や説明がこまかくて、まわりくどい。融通がきかず、繊細さにも欠けるが、約束や規則は正直に守り、他人に対する態度はきわめて丁寧である。このように粘着気質は一般に鈍重な気質であるが、ときに爆発的に怒って自分の正当性をかたく主張することがある<sup>16)</sup>。



つまり上記の特徴から、「きわめて保守的、道徳的」<sup>17)</sup>な人物が連想される訳であるが、浅井が当時の画家の中でも保守的であったことは、以下のエピソードからも明らかである。それは、黒田清輝の帰国前に

行なわれた有名な裸体画論争であり、石井の前掲書から、浅井の述べた意見も含めて引用する。

明治24年(1891年)1月の或夜明治美術会の月次会で「裸体、絵画彫刻ハ本邦ノ風俗ニ害アリヤ否ヤ」と云ふ題が本多錦吉郎から提出され、其討論会が行なわれた。当時絵草紙屋杯の店頭に出て居た低級な石版の裸体画が禁止されたりしたことなどが或きっかけとなって斯う云う題が出されたものと思うが、当時明治美術会の会員で裸体画を描くものもなければ、又生きたモデルによって裸体を研究することもまだ始められてはいなかった。

討論会には本多を始めとして揚忠三郎、生田大癖、杉山某(秀吉か)飯田雄太郎、宮永剛太郎(東山)浅井忠、大森惟中、外山正一等が意見を述べたが、賛否相半し、中には脱線するものもあつた。柳、本多等の賛成説に対して浅井は尚早の故を以て反対意見を述べた。今それを報告書から抽いて見る。

「評議員(浅井君)曰ク私ハ大反対デス(謹聴)成程裸体美術上尙クハ学問上カラ論ズレバ素ヨリ諸君ノ御説ノ通り害ノ無イコトハ私モ万々承知シテ居リマス。実ニ純美ナ結構ナモノデハアルガ、扱其結構ナ物ヲ用ユルニハ結構ナ腕ヲ以テ画カナケルバナラスノハ自然ノ定則ダラウト思ヒマス。処ガ其結構ナ物ヲ結構デナイ腕ヲ以テスルカラ動モスレバ猥褻ニ流レ易イ。其所ラハ当業者ノ最モ注意ヲセネバナラス所ダラウト思フ。日本ニハ明治美術会ノ会員丈デモ余程先生方ガ居リマスケレドモ裸体画ト云フモノハ未ダ曾テ本統ニ腕ヲ現ハシテ画イタ人ハ一人モ無イデス。ソースルト明治美術会ノ方々ハ未ダソレ丈ノ力ヲ持ッテ居ナイダラウト思フ。ソレ程善イモノナレバ皆率先シテ画カベキノ却テ讓ッテ画カスノハ自ラソレ丈ノ腕ガ無イト思ッテ画カナインデセウ。併シ私ハソレハ誠ニ結構ナ御考ヘデアルト竊カニ賞賛シテ居リマス。裸体画ハ決シテイツ迄モ日本ニハ許サスト云フ訳デハアリマセンケレドモ、今現ニ之ヲ許スノハ少々早イカト思ヒマス。諸君ハ尚ホ暫時ノ間御控ヘ下ダスツタラ宜シカラウ。明治美術会ノ御方々ハソレ丈ノ腕ハ未ダ持ッテ居ラナイノデス(ノウノウ)イヤ實際持ッテ居ラナイノデス。如何トナレバ出来ナイカラ画カナインデセウ。デスカラ其腕ノ出来ルマデ少クモ三十年間斗リ辛抱シテ、マダマダ裸体画ヲ画カナインデモ画クモノハ幾ラモアル。現ニ曾テ外山博士ノ御演説ニナツタ丈ケノ画題ヲ御画キナサルコトモ出来ナイノニ裸体画杯ハ少シ早カラウト思ヒマス。」<sup>18)</sup>

以上の浅井の論議は、なかなか卓見であり傾聴に値するものであるし、「賛否相半し」たのであるから、彼一人が特に保守的であった訳ではないが、その後間もなく帰国した黒田は勿論のこと、明治美術会の同僚中の主要人物、柳源吉や本多に比べても、慎重であったことは事実であろう。

また、浅井が激しい怒りを示すことも少なくなかったらしく、黒田重太郎の回想にも、以下のごとくしばしば憤激した様子が伝えられている。

……浅井が如何に田村を敬重していたか、それは浅井に接触していた者のよく知る所である。明治三十九年の春だったかと思う。田村の母堂が長逝された時、唯だ勉強の時間が惜しい一心から、その葬儀の参列には総代を出して済ませて置こうと云う協議が、関西美術院の研究生の間で行われたと聞くと、浅井は大変怒って、君等は田村先生を何と心得ると云って、常の温顔とは打って変わった見幕であった。これは筆者自身が見たことであるから、決して間違いはない<sup>19)</sup>。

これは怒られた当人の直話だから、間違いはないと思うのであるが、西陣のある織屋のおやじで、仕事も仕事であるが高慢なので聞えた男が、ある時帯地か何かの図案を依頼した。工芸方面にも考えのあった浅井は、快くそれを引き受けたが、さて出来て見ると、その男の癖で、何のかのとけちをつける。そのつけ方が、聊か埒を外れていたのであろう、それまで笑って対応していたのが、急に調子を変え、君にはまだこんなのは早過ぎる、横浜あたりの商館で、壁紙でもあさったが近道だろう、と追っ返した。多分追っ返したあとで、あははと笑ったに違いない。研究所でもたまに、雷を落すことはあったが、夕立一過、あとはこのあははで、ものが残らなかったから、怒られて恐れ入りながらも、何だかせいせいするのであった<sup>20)</sup>。

浅井の指導は懇切で、平易な言葉で各々の作品の急所を衝くので、それを聞くものもよく呑み込めたばかりでなく、いけない所は自身で手を下して、どんどん直してやった。指導ばかりではなかった、時には研究生の身上にも立入って面倒を見てやった。併し決して甘やかせるばかりではなかった。若しも研究生の中で越えた言動があった場合は、一喝して皆を縮み上らせたこともあるが、台風一過の後はずぐ晴天となつて、あとに何も残らないので、却ってそれが皆に慕われる原因ともなっていた<sup>21)</sup>。

以上の中で、最初の註19を付した引用は、京都洋画の先駆者田村宗立<sup>22)</sup>の母親の葬儀に際してのエピソードであり、浅井のいささか過剰なまでの義理堅さ＝丁寧さも示すものである。そして彼は時折り、二番目の引用（註20を付す）が伝えるような突然の怒りを発したらしく、最後の引用（註21を付す）にもそのことが触れられている。ただし、このような突然の憤りは、躁病においてもしばしば示されるといふ。しかも、この三番目の引用に述べられたように、浅井の指導法は、まったく「まわりくどく」ない簡潔にして明解なものであった。また、その直後にも礼儀の尊重とは異なる、浅井の自然な温情について言及されている。これらの性格の特徴、精神的テンポの速さや親切さは、てんかん質ではなく、むしろ躁鬱質（循環気質）を思わせるものである。実際、彼には、他にも躁鬱質を連想させる言動があったようであり、それについては節を改めて述べることにする。

ここでは、非常に興味深く重要な出来事に関して考察しなければならない。以下は、『愚劣日記』<sup>23)</sup>の和田英作<sup>24)</sup>と浅井自身による記事、そして『方寸一故浅井忠氏追悼号』誌上の和田の回想談からの引用である。

十一月二十八日 曇 木曜日

今朝は二人共手紙を書いた。午後風呂に久しぶりに這入りたいというので、ボールと三人して自転車でスモールへ出懸けたのは、午後三時半であった、フォンテスプロからの街道を一直線に南進した、途中李助（浅井のこと）がヘコタれたので、休憩してスモールの町に入ったのは五時二十分前であった、古い城を見物し、カフェド、コムメルスに休憩し、ピアノ、ドスモールという湯屋に至り、入浴し、サン、ピエール停車場前のカフェルに又憩い、六時二十一分発の汽車にて、同停車場発ブーロン停車場に乗り、それより三人又自転車で帰路に就きしが、途中李助眩暈の事ありて転覆、少々かすり傷さへ負いたれば、三人徒歩して、七時十五分帰宿せり、晩食を終へ兩人喫煙せる頃、李助に色々問い試むるに、同人一向転覆前後の事を記憶せず、併も晩餐に際し、すすりたるソップも食いたるオムレットも、食らいしやら、食わざりしやら更に記憶せざりしなどは誠に笑止とも気の毒ともいふ可き程であった、其辭食事中いつも可愛がって居る、ミネットという猫を今夜ばかりは膝にのせ様ともせず、食残しを遣らうともせず、只食事中にも左の肩を打ったのに、右の上唇を傷けるは実に不思議だと、二

十遍ほど同じ事を繰返へして居た、ドウモ落車して頭を打った様子も無いが、同人今夜の有様は、何んだか僕をしてキビを悪るがらせた、二人共今夜ばかりは早く寝ようぢゃ無いかと勧めて二階に上った<sup>25)</sup>。

十一月二十九日 曇 金曜日

夕べ自転車に転覆したのは、湯に入っただけのぼせた事と見え、前後の様子を知らぬのは、実に変だ、今朝起きて見たら、左の肩先きが少し痛む、眼の上は紫色になって少しはれて居る、然し夕べは湯にはいったのと、運動をしたので、実によく寝てしまった、外面（和田のこと）に其時の様子を見て見ると、よっぽど変であったようだ、こんな事は僕は始めてである（以下略）<sup>26)</sup>。

「我々（和田、浅井）と宿の主人と三人並んで自転車を曳きづつて歩いたのです。もう少し前から思っ居る中に、浅井君ははや走出して斜面を下って行って行ったが、やがてガターリという音が闇の中で聞えたのです。浅井君浅井君と呼んだが返事がない。我々は驚いて馳けて行った。街道の左右は並木で、並木の外の草原には人の踏みつけた細路が屈つて居る。見れば浅井君の自転車が街道に倒れて居るが、浅井君の身体は並木の外の草原に投げ出されて居ました。浅井君と呼ばれて漸く正気附いて先生は起き上った。どうしたかと聞くと仏蘭西語で『なんでもない』と答えて、それから皆自転車を曳きづつて宿に帰りました。其途々も仏蘭西語で宿の主人と話し、ノンとかワイとか白って居たけれど、一口も日本語を話さず、私には返事もしないので変な感じがしたのです。

帰って見ると浅井君の左りの眼の上が腫れているのです。浅井君は何も口わずに飯を済まし、やがて烟草を呑んでいる時、漸く日本語で『君自転車はどうしたろう』と尋ねるから、私は『自転車は持って来たぢゃないか』と曰った。浅井君は自転車から落ちて家へ帰る迄夢心地であったのです。そして左りの眼の上を摩ってここが痛いといひ、又右の肩を撫でてここが痛いといひ、『どうも君変だねえ左りの眼の上を打って右の肩を打つと云うのは』と曰って、浅井君は『どうも君変だねえ……』と同じことを何通も繰返す。其時の浅井君の様子は余程変でしたよ。今度の病中などもそう云う風で、話の受け答えの変なことがあったそうですが……。』<sup>27)</sup>

以上の記録から推察すると、浅井はこの時てんかん

の発作を起こしたのではなからうか。おそらく「湯に入っただけのぼせた」のではないであろう。彼自身も、「前後の様子を知らぬのは、実に変だ」と言っており、知覚を失っていたことが分る。また、和田に対してフランス語で対応するなど、ひどい錯覚も示している。しかし、最初にも述べたように、私は診断を下すべき任にはないので、疑いを呈するだけに止めたい。

### 3

前節に見たように、浅井忠は、些かはてんかん質の性格特徴を示したとも考えられる。ただし、典型的な闘士型の体格と、てんかんの発作の疑いにもかかわらず、てんかん質的な特徴は、彼の性格に関しては副次的なものであったと思われる。むしろ浅井は、既に述べたように、躁鬱質＝循環気質の性格特徴をより強く示しているようである。次に、クレッチマーの言う躁鬱病質の特徴を掲げ、それに基づき考察を進めたい。

- 1) 社交的、善良、親切、温厚
- 2) 明朗、ユーモアがある、活発、激しやすい
- 3) 寡黙、平静、陰うつ、気が弱い

（上の1、2、3はそれぞれ次のような性格特徴に対応している。）

第一の群にまとめられた特徴は循環気質の基本特徴というべきもので、環境と共鳴し合い、それに溶け込む傾向から発している。（略）

第二の群は躁的な傾向のある陽気な循環病質者の性格であり、第三のは抑うつ的な循環病質者の特徴である<sup>28)</sup>。

以上が躁鬱病質（循環病質）の気分と感情の基本的な特徴であるが、次に引くのは、躁鬱質＝循環気質の普通人（正常者）の性格類型である。

#### 1) 多弁で陽気な人

彼らの地声は大きく、いつでも陽気などんちゃん騒ぎの先頭に立っていて、にぎやかな冗談をとぼしたりしている。しかつめらしい考えごとや、苦勞の多い仕事は好まず、楽しく遊んだり飲んだりするほうを好み、物事の表面を調子よく泳ぎまわる。目だつことが好きで、愛嬌がよく、気持ちがよく、親切だが、時々は無思慮で無神経な言動、素朴なエゴイズムがみられる。

#### 2) 静かな諧謔家

彼らはいつもじっと観察しているだけであまり自分

からは話しをしない。それでいて、時々要点をついた皮肉をいう。しかし生まれつきの話し上手で話題は広く、社交の場や仕事のときには活気づき興奮することさえある。彼等は現世に満足しており、他人や子どもたちには暖い好意をもっている。友だちとしては誠実であり、他人と上手に付き合う術を心得ているが、非情なものや教条的、狂信的なものには好意をもたない。

### 3) 無口で情趣豊かな人

この傾向の人は数としては少ない。抑制された鈍重ともいえる優しさを持ち、人がよく、少しばかりむっつりとしている。情が深く、情にもろくすぐに涙をこぼす。その行動は慎重で、決断することは好まない。どんな小さな職務についても誠実で過度にまで良心的である<sup>29)</sup>。

浅井が、上に見たような躁鬱質の特徴である、陽気さと社交性を備えていたことは、多くの人が回想や評伝に伝えている。以下に、黒田重太郎と隅元謙次郎の記述から、その一部を引用する。

応揚で、人を容れるに客かでなかった証拠には、生来酒を嗜まかったにも拘らず、酒席で酔客を相手にして、共に笑い興じながら、少しも努めてする風がなかった<sup>30)</sup>。

また、誘うものがあれば、ジャルダン・ド・バリ、ムーラン・ルージュやその他大小の舞踏場をも訪ね、夜ふけて笑婦たちが傍に群がっても、酒を飲んでいないのに飲んだようにして戯れていたという<sup>31)</sup>。

また、彼がきわめてユーモアに豊んだ人物であったことを示すエピソードも多い。次に引くのは、和田英作の回想談の一部と、次に浅井自身の戯文、そして、それに対する石井柏亭の評言である。

「此頃大分斯う云う風なものを画かれた様です。まだあります……これですがね。結婚の祝いです。随分極端で……。」

唐紙のまくりには雌犬に尾する雄犬が画かれて居る。雌犬は白で雄犬は黒い。背景には尚疾走する三疋と小使する一疋とがあって「情約成立」の贅がある。

「雄の顔を私に似せようとして苦心したが旨く行かなかったのだそうできて、ハハハハハ、ブルドックに

すればよかったと曰ってやろうと思ってそれなりになって居ました。これが絶筆から二枚目だそうです。』<sup>32)</sup>

「半七八半奎助の三狂人巴里の都に流寓してけり。半七は写真屋を業としてロハ写しの客多し、奎助は看板かきにしてもらわれもの多し。八半はパンやきたらんとして果さず。終に石版屋の職人に住み込みて月謝を払う身分となれり。かくして三人居食する事茲に一年有余糶尽き計極まりて籠城覚東なからんとするに際し半七故郷より召出されてウインの板行屋に住み込むべき仰を受けたり。又八半も首尾よく卒業して近き内にボロ着て故郷に帰る身とはなれり。只憐む可きは奎助なり。罪障未だ不尽。くる年迄は動きもやらぬ身にしありけり。半七先づ羅馬の古巢に帰りて弥々ウインに旅立する事とはなれり。貧交の楽しみも今や茲に終らんとするはいと惜しけれど又日出度門出にもありければ三人ボンム・ド・テールを食うて送別の宴を張り、日頃食いたしと思ひ居りしフリーズをたらふく食うて舌鼓みを打ち、かくなん。

貧交や貧交の絵のおくりもの。 奎助  
行く君をフリーズ食ふて送りけり。  
芋食うて結びし件のおかれなれば  
せめてはのこせ音たかき香を  
君記せよ自炊の鍋のいもの味  
マラコフの宿一年のうち。』<sup>33)</sup>

斯う云う戯文に浅井のユーモアは充分に窺はれるが、交友の間の短信のやりとりも殆どユーモアを以て終始したと云ってよい<sup>34)</sup>。

さらに、浅井が非常に親切であったことを証言する記述も多い。ここでは『愚劣日記』と黒田重太郎の文章から引用しよう。

道端に乞食車がありて、老夫婦が棲んで居る、金巾一枚の壁でこの寒さにどうして寒夜が過ぎれるだろうと思う。ポールとマダムと僕とで、住いをのぞいたら実に膝を容れる計りで、憐れの情が起った。五十仙やうて慰めてやった<sup>35)</sup>。

先生の人柄を表わすエピソードで思い出すのは、正確には私は聖護院洋画研究所の開設する一カ月前に先生のところに弟子いりしていたが、私の書生部屋の障子がボロボロであったところ、私が外出している留守に、先生自から障子の張り替えをして下さった。又

油絵描きの大家は、仕事を終えたら後かたづけをする時は大底、筆を自分で洗わないが、それも浅井先生は自分で洗われた。決して弟子に洗わせるようなことをしなかった<sup>36)</sup>。

以上に見て来たような浅井の行動や態度は、典型的な分裂質やてんかん質の者では決して示されることのないものであろう。クレッチマーの性格の類型は、元来正常ならざる者を対象としているのであるが、躁鬱質＝循環気質に関しては、むしろ最も好ましい者の性格特徴とも言い得るのであって、このような性格の人物で、正常の範囲を逸脱せず、他人を悩ますことがなければ、当然人々に敬愛されるであろう。事実、浅井は非常に尊敬と人望を集めた。石井柏亭は『方寸——故浅井忠氏追悼号』に次のように記している。

卅三年二月廿六日先生欧行の途に上らるる時新橋停車場のプラットフォームには人山が築かれた高島君は車中に入り帽を振って浅井君万歳を叫び之れに和する万歳の声は気笛をも凌いだ先生は非常な人望家であった<sup>37)</sup>。

また、今泉篤男氏も次のように述べている。

それから、五十七年間（1964年当時）、毎年、十二月十六日の命日には当時の関西美術院の弟子たちによって金地院で黙語忌が続けられて今日に及んでいる。（中略）半世紀以上もの永い間、弟子たちが、師の命日に集って、その墓前に額づいている慣例を私は画壇のうちで他に知らない。当時、二十歳前の少年たちは、今日ではすでに七十歳をはるかに越している。彼らは、いまま尚昨日のこのように浅井先生を懐しんだ。墓前の山茶花も、五十七年の間にかかなりな老樹になっている。老いたる弟子たちは、感慨深そうにその山茶花の実を一つ二つもぎとってポケットに入れたりした<sup>38)</sup>。

さらに、浅井は保守的ではあったが、決して権威主義的ではなかった。例えば、第2回の関西美術会展<sup>39)</sup>の開催に当っては、彼は自ら会場の設営にまで参加している。中沢岩太は、以下のようにその時の様子を伝えている。

此挙や浅井君は、身に泰斗の重望を荷いながら、親しく出でて鎗を採りて額面を掛け又は引幕を張りなど

して、以て衆と労働を共にして、開会準備を為し、以て青年家を励せり<sup>40)</sup>。

しかし、このような非権威的な態度は、一面では消極性へとつながる。『愚劣日記』にも次のような記述が見られる。

十六日伊藤侯爵歓迎会をやるとて、巴里から通知が来た、僕等田舎ものは、貴人に接するのは恐れ多いから謹んで断って仕舞った<sup>41)</sup>。

このような消極的な気分が嵩じて、彼は争いを避けるため、何事につけても他人に譲るといふ、きわめて退屈的な態度を取るようになったのではないか。石井の以下の記述は、浅井の陥って行った閉塞的状况を示唆したものと思われる。

旧友松井昇は友人のうちでは浅井が一番よかったと云って居る。和田英作は浅井を評して私人としては申分ないが、公人としては寧ろ拙い方であったと云う。これも穿ち得た言であろう<sup>42)</sup>。

「公人」としての「拙い」やり方の端的な例は、黒田清輝との角逐を避け、東京美術学校教授の職を放擲し、浅井教室の弟子達を遺棄して京都へ移住したことであろう。

ところで、上に見たように、浅井が循環気質の特徴をより強く示していたとして、彼が端的に鬱病に陥ったり、その回復に伴って躁病相を示したりしたことがあったであろうか。次節では、それを検討したい。

#### 4

前述した京都移住は、浅井忠の後半生の大事件である。彼は1900年（明治33年）2月から1902年（明治35年）8月までフランス留学のため日本を離れており、東京美術学校の教授の職には在籍のままであったが、本人は最早東京美術学校へ復帰するつもりはなかった。浅井は、パリで、後に京都高等工芸学校<sup>43)</sup>の初代校長となった中沢岩太と出会い、同校の教授へ転出する約束を交して帰国したのである。転任するに当たって、周囲からの反対もあり、次の引用のように条件は必ずしも良くはなかった。

……彼の転任については、東京美術学校校長や当時パリ出張中の文部視学官正木直彦などと協議した結

果、多少難色があったようであるが、結局浅井自身の意志に従うこととなった。しかし、なお局外の有力者に異議があったという。おそらく、これは明治美術会結成以来の同志で、パリ在留中の小山正太郎あたりを指すものと思われる。後年、小山と同じ立場にあった松岡寿は「切角東京美術学校教授に会として推薦するのに」と私（隅元謙次郎）に漏らしたことがあったが、浅井の行動は、彼等の期待を裏切ったものであったかも知れない<sup>44</sup>。

浅井はこれらを敢えて押し切ったのである。しかし、これ程の決心をした理由は明らかではない。石井柏亭以来、当時の浅井の真情を吐露したものととして、評伝には必ず引用されて来た1901年9月13日付の、弟達三宛ての手紙を以下に掲げるが、それを読んでも、なお釈然としない。

現今の日本の社会程イヤなものはないかと存候。なま中外国を見て多少の希望を抱て帰れば一も其希望を達する事不叶、只煩悶して人に悪まれ人に攻撃される材料と相成候が洋行帰りの常なり。何しろ日本と西洋とは総ての事があまり異なりて居るから一方に慣れるとどうしても衝突が起る。総て西洋の方が實際的にして日本の方は空想的に出来て居る……（中略）美術工芸など云う事は今百年斗りはトモ旨く行くことはなかりうと思つと、小生等が当地に来て見て帰っただけが結局煩悶の種となりて、国へ帰っては施す手段は少しもなき様に思つと、見ぬ方が増しならんかとも思ひ居り候。其上日本人は殊に気が小サター人エラキものが出ると寄てタカッテイジメて仕事の出来なくなる様にする。自分よりエラキ人をこしらえるが嫌いな人種だから困る。殊に美術家とか文学者とか云うものは咄しにならぬ腐った社会だから、小生は今ではあきらめて、総て消極的でなんにもしないので是から社会を退て遊んで仕舞んと覚悟である。夫故京都へ引込んで陶器でもいぢって暫らく遊ばんが為転任の約束をして置た訳である。色々食い方の材料は見付けて置た積りだから、からださえ丈夫なら乾死ぬ事はない……（下略）<sup>45</sup>。

仮に、この手紙が転任を決意するに至った感情を明らかにしているとしても、その感情と浅井を取り巻く現実の状況とはかなり隔たったものであった。確かに、出自も立場も異にする黒田清輝との角逐は避けられないとしても、黒田も含めて周囲の人々が、「咄し

にならぬ腐った社会」と呼ばれなければならない程の存在であったかどうか、大いに疑問がある。ここでは、むしろ浅井の被害妄想が露わに示されている。その被害妄想は、当時浅井が抑鬱状態に陥っていたことの標識ではないであろうか。しかも、一見他罰的と思われる文面も、「芸術家とか文学者」の中には当然彼自身も含まれるのであるから、実は自責の念、罪責感の表現と考えることも可能である。言うまでもなく、罪責感も抑鬱状態の感情の特徴である。

ところで、この手紙が書かれた1901年9月は、浅井が堰を切ったように制作を始める、4回目のグレー（Grez-sur-Loing）<sup>46</sup>滞在（同年10月1日～翌3月21日）の直前に当る。3回目のグレー滞在（同年5月8日～17日）から、それまで4ヶ月半パリに留まっていたのであるが、その間は重要な作品は描かず、日記も残されていない。しかし、10月からのグレー滞在中の早い時期に、『グレーの洗濯場』（pl. 4、ブリヂストン美術館蔵）、『グレーの柳』（pl. 5、京都市美術館蔵）、『グレーの秋』（pl. 6、東京国立博物館蔵）など、浅井の最高傑作が次々と制作されたのである。従って、手紙の書かれた9月中旬は、既に抑鬱よりの回復期に入っていたことは間違いない。ちなみに、他人に対する不満感も回復期に復活する感情なのである。そして、10月以降は全く回復して、『愚劣日記』からも分かるように大変陽気に暮らし、前述の秀れた作品群を描いたのであった。このように、制作が進まない時期ときわめて旺盛な意欲を示す時期が交替するということは、気分の周期的な変調を思わせる。それは、年代記的に彼の生涯の作品を検討すれば、さらに明らかになると考えられる。





5



6

一方、浅井が、他人をあきれさせるような躁病に陥ることは殆どなかったと思われる。しかし、彼が時に軽躁性を示したことは、黒田重太郎が都鳥英喜<sup>47)</sup>の話と伝える次のエピソードからも明らかである。

……都鳥英喜の話によると、あれでも若い時は随分茶目だったらしく、例の部美術学校時代、風景画の宿題で、所は忘れたが、何でも郊外の池のある所へ、同級生と一緒に写生に出かけたことがある。岸に1艘ぼる舟が繋いであったが、他の者が池畔で描いている間に、浅井は1人それに乗って漕ぎ出した。それがおとなしくでもしていることか、はしゃぎ廻っている間に舟が引っくり返り、携えていた絵具箱を水底に沈めて了った。色々やっても取れないので、友人の描き了るのを待ち、その絵具箱を借りて描いたが、その時はもう日の暮れるのに間もなかったが、浅井のその速写の風景画は、あくる日、指導者のフォンタネジから激称されたと言う<sup>48)</sup>。

また、このような精神的テンポの早さは、後半生の京都時代にも、制作の速度の早さとして発揮されたようであり、やはり黒田が次のように回想している。

……聖護院の家から遠からぬ白川や若王子あたりの

写生には、私も時として伴われた。こちらが鉛筆画の枚を半分も終らない中に、ワットマン4ツ切を2枚は楽々描き上げるのだから、仕事の早いにも驚いたが、それでいて急所急所はちゃんと抑えてあるので、首をふって感心するばかり、どうだいと云われても、はあと云った切り、言葉は続かなかった<sup>49)</sup>。

以上、やや常識に外れる言動を検討したが、このことから浅井忠は躁鬱質＝循環気質の性格特徴を備えていた、と判断することが出来るのではないであろうか。もっとも、浅井の律義さや正義感などから見て、彼の性格は、下田光造の称えた鬱病の病前性格である執着性格、あるいは、テレンバッハ (Hubertus Tellenbach, 1914～ ) のメランコリー親和型<sup>50)</sup>に近い特徴を示す、という意見もあるに違いない。下田によれば執着性格の特徴とは以下の通りである。

此異常気質(執着性格)に基づく性格標識としては、仕事に熱心、凝り性、徹底的、正直、几帳面、正義感や義務責任感、胡麻化しやズボラが出来ない等で、従って他から確実人として信頼され、模範青年、模範社員、模範軍人等と賞められて居る種の人である<sup>51)</sup>。

しかし、浅井は仕事熱心ではあろうが、決して「徹底的」に完璧を追求することはなかった。その制作態度は、前述のように即興的なことが多かったと思われる。ただし、メランコリー親和型に特徴的な他人本位の態度は、既に見て来たように、浅井にも強く認められる。ともあれ浅井は、フリードリッヒ (Caspar David Friedrich, 1774～1840) やコンスタブル (John Constable, 1776～1837) と同じく、分裂病圏ではない、躁鬱病圏の画家と言うことが出来る。次には、そのような彼の性格がその作品に対して持つ意義についても述べたい。

## 5

浅井忠が、鬱病を発症しても不思議ではない状況に育ったことは指摘されてよいであろう。すなわち、7歳の時に父親を失ない、幼い頃から家長としての過重な負担を強いられて育ち、母親に対しても通常の子供のように依存することが出来なかったのではなかろうか。土居建郎氏は鬱病の原因について、次のような精神分析的考察を行なっている。

そしてこのさい、人間のもっとも基本的な対人的欲

求は「甘える」ことすなわち依存欲求であるという仮定から出発しよう。ところで甘えるとは、相手の愛情に依存し相手との一体感を求めることである、と定義される。しかしもともと一体感を所有している者ならば、ふつうの意味では甘えを示さないであろう。実際、うつ病患者は少なくとも表面上は甘えることがなく、相手に依存したいという意識すら伴わないことが多い。それにかかれらは通常両親に甘えられる境遇に育ってはいない。そこで以上のことからつぎの推論をくだすことが可能となる。すなわちこのような人たちは、幼時ある種の持続的な精神的外傷を受けて親に甘えらしく甘えるという体験をもたず、その代わりとして想像上の一体感をいただくようになったのではなからうか。私は、このように本来の依存欲求の不満を防衛するために生じた状態こそナルチスムスとよばれるべきであると思う（これは従来のナルチスムス概念と異なる）。この心的防衛としての一体感が失われたときに、いままで隠蔽されていた基本的葛藤が病的状態となって出現するのであろう<sup>52)</sup>。

また、飯田真氏も以下のように記述している。

うつ病圏に傾いた症例に即してみると、特定の社会的、家庭的状況、例えば体制や伝統の維持あるいは復興が強く要請される社会や家庭にあって、その期待を荷わねばならない状況と結びついて、自立をめぐる思春期ないしは青年期の危機が生起し、それを克服するための心的機制として執着性格が顕在化し、成人期において庇護的な空間喪失など或る種の状況下におかれると、この心的機制が有効性失い、その結果としてうつ病が発病すると解釈できる場合が多い<sup>53)</sup>。

浅井は、「体制や伝統の維持あるいは復興が強く要請される」環境に育ったし、画家を志し、自立を来たすまでには、家族への強い反抗を示したりもしている<sup>54)</sup>。そして、45歳になってからのフランス留学は、「庇護的な空間喪失」に当たるであろう。あるいは、幼時に次弟を亡くしたことも、浅井にひそかな罪責感を抱かせ、抑鬱状態の原因になったかも知れない。

しかし、躁鬱質の特徴とともに、典型的な執着性格を示したコンスタブルと比べれば、その制作態度の違いは歴然としている。コンスタブルは、完璧な構図を求めて完成作大のスケッチまでも描いており、写生に熱中するあまり、野ねずみがポケットに飛び込んでも気付かなかったというエピソードも伝わっている<sup>55)</sup>。

これに対して、前にも見たように、浅井は即興的で速筆であり、戯画を描くこともしばしばあった。やはり、浅井の場合は、躁鬱質の特徴をより強く示しているようである。クレッチマーによれば、躁鬱質（循環気質）の芸術家（特に作家）は、次のような特徴を持つと言う。

ここでは、循環気質の特徴をもっている作家として、リアリズム作家とユーモア作家を取り上げなければならぬだろう。その両者は密接に結びついていて、はっきりと二つの違うタイプとして区別することはできない。つまり、リアリズム作家の作品はユーモリストの調子で色づけられているし、ユーモリスト作家の作品には強い写実的な部分が相当見いだせるからである<sup>56)</sup>。

なお、それでも浅井の作品は、コンスタブルや、同じく執着性格の画家フリードリッヒの作品との類似を示しており、徳田良仁氏が後者に言及しつつ述べた次の言葉は、浅井の作品に関しても妥当するものであろう。

分裂病的世界における多元的な様式化をはじめ、幻想的、夢幻的表現、さらには装飾的・常同的傾向など、特異な創造性とは視点をかえて、広く人間性の基盤に根源をもつうつ病の世界は、万人の共感を呼び起こしうるいわゆる一般的写実的表現様式の自然描写から深く象徴的意味をこめた表現に至る芸術の一宝庫であるといえましょう<sup>57)</sup>（傍点筆者）。

さて、個々の作品の意義については、以上の考察を踏まえながら、なお慎重に検討しなければならない。また、浅井忠の歴史的・社会的位置付けも、性格特徴を考慮しつつ改めて行なえば、新しい意味も発見することができると思われる。しかし、それは、いずれ稿を改めて発表したい。

謝辞：浅井忠および明治美術の資料に関しては、神奈川県立近代美術館の青木茂氏より度重なる御教示を受けました。特に記して感謝の意を表します。

追記：本文中の引用は、すべて横組みとし、必要ある場合を除いて、旧字を新字に改めた。なお、仮名遣い、和数字は原文のままとした。

〔註〕

- 1) 隅元謙次郎『浅井忠』, 日本経済新聞社, 1970
- 2) 佐倉市史編さん委員会『佐倉市史』, 1973, p. 445
- 3) 田中 暢『浅井画伯の幼年時代』(池辺義象編『木魚遺響』, 芸艸堂, 1909, pp. 10~11)
- 4) 窪田洋平『黙語小伝』(『木魚遺響』, p. 10)
- 5) 窪田 ibid (『木魚遺響』, p. 9)
- 6) 中沢岩太 (1858~1943), 工学博士, 東京帝国大学工科大学教授, 京都帝国大学理工科大学学長, 京都高等工芸学校校長。
- 7) 乾由明編『浅井忠』, 至文堂(近代の美術 5), 1971
- 8) 柏木恵子『子どもの発達における父親の役割』, 現代のエスプリ No. 142, 1979年5月, p. 75; なお当該論文の初出は「母子研究」(社会福祉研究所, 1978年2月)である。
- 9) 石井柏亭『浅井忠』, 芸艸堂, 1929, p. 51
- 10) Sula Wolff “Children under Stress”, 1969, 邦訳『ストレスに遭った子供たち—子供の精神分析』(内村節子訳), 河野心理教育研究所出版部, 1977, pp. 88~89
- 11) 黒田重太郎 (1887~1970), 聖護院美術研究所と関西美術院に於て浅井に師事した。京都市立美術学校教授
- 12) 黒田重太郎『浅井先生のこと』, 三彩 No. 253, 1970年1月号, p. 15
- 13) E. Kretschmer “Körperbau und Charakter”, 1921; 邦訳『体格と性格』(相場均訳), 文光堂, 1960
- 14) 石井 ibid., p. 87
- 15) そのような誤解を避けるため, ミンコフスカ (F. Minkowska) は「粘着気質 (glischroidie)」という言葉を用いた。
- 16) Wilhelm Arnold “Person, Charakter, Persönlichkeit”, 1969; 邦訳『性格学入門』(託摩武俊訳), 東京大学出版会, 1976, p. 93
- 17) 宮城音称『性格』, 岩波書店, 1960, p. 29
- 18) 石井 ibid., pp. 41~43
- 19) 黒田重太郎『京都洋画の黎明期』, 高桐書院, 1947, p. 79
- 20) 黒田重太郎『浅井忠—人と作品』, みずゑ No. 593, 1955年1月号, p. 37
- 21) 黒田『京都洋画の黎明期』, p. 151
- 22) 田村宗立 (1846~1918), 京都府画学校の西宗(西洋画科)において, 1881(明治14年)から1889(明治22年)まで教鞭を取った。
- 23) 『愚劣日記』, 1901年(明治34年)10月から翌年3月にかけてのグレー滞在中に, 和田英作と交替で記した。1901年10月1日から12月19日までの記事があり, 『木魚遺響』に所収されている。なお, 浅井は杢助, 和田は紫桐(後に外面)の号を用いている。
- 24) 和田英作 (1874~1959), 鹿児島生まれで黒田清輝直系の弟子であるが, グレー村で共同生活をするなど浅井とも非常に親しかった。東京美術学校教授。
- 25) 『愚劣日記』, 11月29日の項(『木魚遺響』, pp. 128~129)
- 26) 『愚劣日記』, 11月29日の項(『木魚遺響』, pp. 129~130)
- 27) 和田英作『滞仏中の浅井君』, 方寸第2巻第2号, 1908年(明治41年)2月, p. 4
- 28) 高頭忠明『循環病質の気質—クレッチマーの「体格と性格」より—』, 現代のエスプリ No. 88, p. 29
- 29) 高頭 ibid., pp. 32~33
- 30) 黒田『浅井忠—人と作品』, p. 37
- 31) 隅元 ibid., p. 25
- 32) 和田 ibid., p. 3
- 33) 石井 ibid., pp. 89~90; この戯文は, 石井によれば, 「半七(田中)八半(中里)杢助(浅井)が此共同生活の終りを告げる時記念として浅井が戯画—三人じゃが芋を食ふ図—を描き自ら讀をした扇面」の讀である。
- 34) 石井 ibid., p. 90
- 35) 『愚劣日記』, 11月12日の項(『木魚遺響』, p. 116)
- 36) 黒田『浅井先生のこと』, pp. 14~15
- 37) 石井満吉『浅井先生を憶ふ』, 方寸第2号第2巻, 1908年(明治41年)2月, p. 9
- 38) 今泉篤男『晩年の浅井忠』, 三彩 No. 178, 1964年10月, p. 42
- 39) 関西美術会第2回展覧会は, 1903年(明治36年)11月1日から同月25日まで, 岡崎美術館に於て開催された。
- 40) 中沢岩太『浅井君と関西美術会』, 隅元 ibid., p. 44より引用
- 41) 『愚劣日記』, 11月14日の項(『木魚遺響』, p. 117)
- 42) 石井『浅井忠』, p. 160
- 43) 京都高等工芸学校, 1902年(明治35年)3月28日開校, 現在の京都工芸繊維大学の前身。
- 44) 隅元 ibid., p. 40
- 45) 石井 ibid., pp. 108~109より引用

- 46) グレー村 (Grez-Sur-Loing) はパリ南東約80km, フォンテンブロー (Fontainebleau) の森の南に位置する。
- 47) 都島英喜 (1873~1943), 浅井の従弟で弟子の洋画家。聖護院美術研究所, 関西美術院で浅井の指導を助けた。
- 48) 黒田『浅井忠——人と作品』, p. 37
- 49) 黒田 *ibid.*, p. 39
- 50) Typus Melancholicus. <Hubertus Tellenbach “Melancholie—Problemgeschichte, Endogenität, Typologie, Pathogenese, Klinik”, 1961, 74, 79; 邦訳『メランコリー』(木村敏訳), みすず書房, 1978> 参照
- 51) 下田光造『躁うつ病について』, 現代のエスプリ No. 88, 1974年11月, p. 39; なお当該論文の初出は「米子医学雑誌」(米子医学会, 第2巻第1号, 1950年3月)である。
- 52) 土居建郎『うつ病の精神力学』, 現代のエスプリ No. 88, 1974年11月, p. 98; なお当該論文の初出は「精神医学」(医学書院, 第8巻第号, 1966年12月)である。
- 53) 飯田真『躁うつ病の状況論』, 現代のエスプリ No. 88, 1974年11月, p. 73; なお当該論文の初出は「臨床精神医学」(第2巻第1号, 1973年1月)である。
- 54) 窪田洋平は、『黙語小伝』(註4参照)に、「明治

六年出京, 日本橋西河岸に(耕文社と覚ゆ)大河内某の英学塾に入り, 後箕作塾に移る, 八年洋画に志し, 国沢氏の彰技堂に入りしは, 兩人(浅井と窪田のこと)の相談にて, 伯叔父達に謀らざりし, 当時美術などの語はなく, 単に画かきと賤称せし武士気質の親族輩の攻撃には殆ど閉口したり」と, 浅井が自立を達成するまでの「反抗」について述べている。ところで, 飯田氏は前掲の論文中で「7~8年来の転居うつ病, 再発うつ病の発病状況研究の過程で症例の生活史を retrospectiv に分析すると, 多くは幼時には余り目立たない子供であるが, 思春期ないし青年期になると一過性に不安, 心気, 恐怖, 強迫などの神経症様症状, あるいは反抗, 家出, 不良化などの傾向が出現するが, 社会的自立を契機にこれらの症状が消退し, 几帳面, 勤勉, 仕事熱心, 良心的といった執着性格の側面が顕在化してくる場合をしばしば経験した」と述べているが, 窪田の証言等を考え合わせる時, 浅井の性格の発達に関してきわめて示唆的である。

- 55) John Walker “Constable”, 1979; 邦訳『コンスタブル』(阿部信雄訳), 美術出版社, 1979, p. 74

56) 高頭 *ibid.*, p. 34

- 57) 徳田良仁『うつ病と創造性』(『鬱病』, 有斐閣, 1975, p. 204)